

在日外国人の高齢者支援に関するインタビュー調査報告

大橋充人*¹・木下貴雄*²・神田すみれ*³・山本理絵*⁴

1. はじめに

日本に在住する外国人高齢者は増加している。例えば、1990年の「出入国管理および難民認定法」（以下、「入管法」という）改正によって急増したブラジル人の場合、60歳以上の割合は、2012年末に5.4%であったものが2022年末には11.8%と倍以上に増え、今後も増えていくことが予想される。しかしながら、外国人高齢者に関しては、在日コリアンや中国帰国者に関する研究や支援活動は行われてきたものの、1990年の入管法改正以降に入国してきた、いわゆるニューカマーと言われる人たちについては、親に連れられてきた子どもたちの教育に目が行きがちであり、また、働き盛りの年代で入国してきた人が多かったことから、彼らの高齢化に気づく人はほとんどいなかった。今でこそ、外国人高齢者をテーマとした研究も出てきているが、一つの転機となったのは、2015年度から筆者らが始めた「外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト」であろう。このプロジェクトは、介護通訳者の養成・派遣を中心的な取組と位置づけ、合わせて、外国人への介護制度の周知と外国人の介護問題に関する啓発活動を行ったものである¹⁾。活動拠点が愛知県内であったことから、愛知県が2018年3月に策定した「あいち多文化共生推進プラン2022」（以下、「愛知県プラン」という）において、外国人高齢者に対する課題や取組の必要性が公の文書として初めて明文化され、このプランに基づき、外国人高齢者に関する実態調査などの取組が行われてきたところである。

もっとも、外国人高齢者は、愛知県プランの中で単独の課題として取り上げられたわけではない。定住化・永住化が進む中で、ライフサイクルに沿って、乳

幼児期から老年期までの課題や取組を取り上げる中で示されたものである²⁾。こうしたライフサイクルの視座を初めて多文化共生に取り入れたのは、川村（2015）である。この中で、在日外国人の出産・育児、就学、キャリア形成、居住、結婚、家庭生活、まちづくりへの参画のほか、老後の生活や祈り・葬儀・墓・弔いを取り上げられている。ライフサイクルの視座によって、在日外国人の日本での生活の長期的展望を示すことができ、「生」だけでなく、「死」にも目を向けさせることが可能になった。そして、死を見据える上では、どう生きてきたかが重要であり、ライフステージの積み重ねによって、どのような最期を迎えるか／迎えたいかがちがってくる。したがって、外国人高齢者を理解する上では、日本で暮らしてきた外国人が、どう生きてきたのかを知る必要があり、そのためのオーラル・ヒストリーの聴取は欠かせない。大橋他（2023）では、外国人高齢者の実態を把握するために、アンケート調査を実施したが、本研究では、その結果を踏まえながら、外国人10名に対してインタビュー調査を行った。

なお、本研究は、「多様化社会における教育と社会福祉の連携による生涯発達支援に関する総合的研究」の一部である。研究全体としては、国籍・民族的アイデンティティ、障害、経済的貧困、性的マイノリティ等、多様性を受け入れる社会の中で、一生涯を通じた発達支援において教育と社会福祉がいかに連携していけばよいか、その効果的な支援方法及び支援システムを明らかにすることを目的としている。

本調査結果をもとに、今後は、外国人高齢者支援につながる、教育と福祉の連携の課題と必要な視点や実

践モデルを分野横断的視点から明らかにしていきたい。

2. 在日外国人の高齢者支援に関する研究の動向

戦前から日本に住んでいるオールドカマーの在日コリアンはすでに高齢化しており、外国人高齢者に関する先行研究と言えば、在日コリアンに関するものが多数を占める。在日コリアン高齢者の独居や無年金による生活の貧困を指摘した庄谷・中山(1997)、在日コリアンの認知症高齢者をケアする場合には民族性を尊重することが重要であると指摘した金(2004)、要介護の在日コリアン高齢者の特徴及びケアワーカーがケアを提供する上での困難感を示した李他(2017)などである。一方、同じオールドカマーである老華僑に関する先行研究は異国での老後をテーマとした鐘(2007)や何(2010)があり、ライフヒストリーを集めた鐘(2017)などがある。

中国帰国者については、介護に関して帰国者にも支援者にも情報提供が必要であると指摘した名和田(2015)や潜在的ニーズの把握や当事者からの主体的な情報発信の必要性について述べた森田(2018)がある。王(2019)は、帰国者の介護には「五つの壁」(コミュニケーション・識字・味覚・習慣・心)があり、介護に関する専門知識を持った介護通訳の養成研修・派遣システムの構築や外国人に対する介護保険制度の周知、行政・福祉機関・介護施設への理解啓発が必要であると指摘している。

日系南米人の高齢化については、鈴木(2008)が早い時期から指摘をしている。その後、さらに高齢化が進み、日系社会にとって喫緊の課題であることを林(2014)は指摘した。なお、鈴木(2008)はサンパウロ新聞社編集局長が、林(2014)は日系人労働者派遣会社代表者が書いたものであり、日系南米人の高齢化については、まず、現場の中から警鐘が鳴らされたと言える。また、当事者の立場から、日系人コミュニティに向けて老後や終活についてインターネット上に寄稿したアルベルト松本(2021)もある。ようやく、日系南米人の高齢化に注目する研究者も出てきているが、課題の可視化にあたっては、現場からの指摘に負うところが大きい。

在日フィリピン人については、高畑(2020)が高齢化の問題を取り上げている。川村(2015)はライフサイクルの老年期の課題の一つとして在日ムスリムの埋葬と墓について取り上げており、大橋(2021)は在日

ムスリムの語りの中で葬式・埋葬について触れている。介護全般については、沖縄在住の米国人・イスラエル人・インド人・フィリピン人・台湾出身者に対してインタビューした松本・大城(2020)や介護の実態調査や介護通訳者の必要性について指摘した王・渋谷(2018)がある。多文化背景を持つ高齢者の支援については、牧田(2020)がある。李(2021)は介護現場では様々なニーズと課題が複合的に顕在化しており、民族性に配慮した介護サービスが必要だとしている。

以上のとおり、少しずつ進んできているものの、ニューカマーの高齢化に関する研究は少ない。また、これまでの研究では、老後の生活や介護を見据えた声は聴かれてこなかった。そこで、本研究では、老後や介護を中心にインタビューを行い、人生観や死生観を含めた分析をすることにより、外国人高齢者支援について検討していくこととした。

3. アンケート結果から見えてくる外国人高齢者の現状と老後のイメージ

インタビュー調査に先立ち、2021年12月から2022年6月にかけてアンケート調査を実施した。その結果は大橋他(2023)に詳しいが、50歳代以上の中国出身者、南米出身者、フィリピン出身者に対してアンケート用紙を配り、66名から回答を得た。アンケート回答者に限ったものであるが、結果から見えてきたイメージは、次のとおりである。

現状は、健康保険や年金に加入しており、健康であり、病気もない人が多かった。また、家族や友人と一緒にいたり、仕事や趣味に打ち込んでいる様子がうかがわれ、社会との接点を持っている人が多かった。将来は、日本で老後を過ごそうとしている人が多く、趣味や健康づくり、家族団らんなどを求めている人が多い。老後の不安としては、経済的不安が最も多く、次いで、健康の不安、災害時の不安が多い。介護保険制度については、多くの人が知っていたが、内容を理解している人は半数程度しかいなかった。介護や終末期ケア・看取り、葬儀に対する望みについては、「特にない」や「家族の望むようにしてほしい」といった回答が多く、本人の望みは、あまりない。

以上のことから、家庭もあり、仕事もあり、社会との接点も持っており、老後は、家族に囲まれ、趣味や健康づくりをしながら、のんびりと過ごしたいと考えており、そのためには、老後への備えをしておかなければと思いつつ、具体的には何もしていないといった

外国人高齢者のイメージを描くことができる。

大橋他（2023）では、こうしたイメージは、日本人高齢者と概ね同じであり、外国人高齢者の問題を考える上では、日本人／外国人の区別なく、高齢者全般として考えていく必要があるのではないかと指摘している。そのうえで、言葉や文化の面、日本社会のシステムになじみがないことに起因する躓きなど、外国人高齢者独自の課題もあるのではないかと指摘する。しかし、こうした課題は、アンケート結果からは、はっきりとは見えてこない。そこで、インタビュー調査によって、外国人高齢者のニーズ等について多面的・多層的に検討していくこととした。

4. 研究方法

アンケート回答者のうち、インタビューに協力してもいいと申し出のあった者の中から、表1に挙げた10名に対して、2022年9月から2023年10月にかけて、母語または日本語による聞き取りを行った。来日の経緯と現在の生活環境、将来についての考え、介護に関する困りごと、不安、要望などについて、1時間半ほど非構造化面接を行った。

なお、本研究の実施・発表にあたっては、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている（研究課題名「多様化社会における教育と社会福祉の連携による生涯発達支援に関する総合的研究——外国人高齢者支援に関する教育と社会福祉の連携に関する調査」）。また、インタビュー対象者には、研究目的・方法、協力への自由意思の尊重、プライバシーの保護等について、協力説明・依頼書を用いて説明を行い、承諾を得ている。

表1 インタビュー対象者

| | 出身 | 性別 | 年代 |
|---|-------|----|--------|
| A | 中国 | 男性 | 70～74歳 |
| B | 中国 | 女性 | 50～54歳 |
| C | 中国 | 女性 | 60～64歳 |
| D | ブラジル | 男性 | 75～79歳 |
| E | ブラジル | 女性 | 55～59歳 |
| F | ブラジル | 女性 | 55～59歳 |
| G | ボリビア | 女性 | 65～69歳 |
| H | ボリビア | 男性 | 50～54歳 |
| I | ベネズエラ | 女性 | 65～69歳 |
| J | フィリピン | 女性 | 50～54歳 |

5. 調査結果

(1) 中国出身者

インタビュー調査した中国出身者の3名は50代・60代・70代、来日した時の年齢は20代・30代・60代と様々であり、抱える困難さも様々であった。

Aは難病を抱えている。病魔によって体が少しずつ思うように動けなくなっていき、自分が自分でなくなっていく。自分がどうなっていくのかという先が見えない不安に加え、言葉の壁、文化の壁が立ちちはだかり、先のことが何も考えられない心情と、いかに現状維持できるのかという焦りが入り混じった複雑な思いがあった。Aの語りは、以下のとおりである。

2009年、残留婦人の二世として60才くらいで来日して現在は無職。子どもは3人いて、息子1人は日本におり、残りの2人（息子と娘）は中国で暮らしている。日本にいる息子は近くに住んでいる。日本にいる孫も30才になった。近くに住んでいる息子は自分たちのことで精いっぱい、経済的にもあまり余裕がないため、自分たち（夫婦）のことで子どもに迷惑をかけたくない。

3年ほど前に難病と診断されて、今のところはまだ病状に大きな進展はないものの、歩く時にいつもの安定感がなく、めまいもある。そのため、外に出ることが少なくなって、家で横になることが多くなった。今のところは何とか自立しているが、これから先はどうなっていくのかわからないし、心配で不安を抱えている。完治できない難病を抱えているため、いまはとにかく健康を維持することだけを考えている。アンケートにはいろいろと書いたが、今はこの完治できない病気のことと健康のことを一番に考えていて、正直なところ、それ以外のことはあまり考えられないでいる。

老後のことについては、日本なのか中国なのかは不透明なところもあるが、恐らく日本で迎えることになると思う。もし、日本で介護を受ける場合は、子どもに迷惑をかけたくないから、中国人の妻に介護してもらうことになるだろう。訪問介護とか、デイサービスとか、入居施設の場合は、日本語が十分に通じないことが心配で、できれば中国語ができる介護スタッフがいるところが安心できる。

Bは子どもを一人で大学まで行かせることができた。子どもが自立したのを機に、老後は中国で過ごそ

うと一時帰国したが、今の中国は、自分がいた頃の中国ではないという現実直面した。そして、中国に戻りたいという想いと日本に根を下ろさざるを得ないという複雑な気持ちを抱えることとなった。

中国帰国者二世の配偶者として20歳代後半に来日。日本に来てからは諸事情によって夫と離婚した。子どもが1人いて、今はもう大学を卒業して就職している。一人でなんとか子どもが大きくなるまで育ててきたが、本当に大変だった。

今は介護施設で働いている。介護の仕事はかなり長く続けている。勤務は夜勤が中心で、日中は一人でいることが多い。普段は、日本人や地域とのつながりはあまりなく、中国人のコミュニティとのつながりもあまりない。

中国帰国者は高齢になり、介護が必要になった人が増えている。日本語はあまり通じないし、生活の習慣も違うから、普通の日本人が利用する介護施設ではやはり難しい。専用の施設が必要だと思う。そのような施設があればそこで働きたい。ぜひ、専用の施設を作って欲しい。一般施設への理解啓発も必要。

日本人のコミュニティや中国人のコミュニティとのつながりも薄い中、子どもが大きくなった今では、一人でいる時間が多くなり、自分の生きがいや楽しみはなんなのか、よくわからないでいる。3年ほど前までは、老後は中国で送るものと思っていた。しかし、自分の中国国内での年金などの手続きを行うために一時帰国したときは大変だった。日本のように必要な書類をそろえればスムーズにできるわけではなかった。人脈の国なので、ツテがなければ手続きを行うことができなかった。嫌になって、途中であきらめようとも思った。

このことを通じて、もう今の中国には自分の居場所がないということを感じた。長く中国を離れた自分が老後を再び中国で送るといふ、ささやかな希望が消えて、日本で老後を暮らすことに考えを改めた。それまでは日本での老後を考えていなかったため、これからきちんと考えていかなければと思っていて。老後のライフプラン（生活設計）も考えていきたい。最近、中国にいる年老いた親のことが気になるようになった。

Cは知的障害を持っている。言葉や文化の壁などへの対応が十分になされていない今の日本社会の環境の

中で、漠然と老後生活に不安を抱えており、ライフプランを描けないでいる。

中国残留婦人の二世として30歳代後半で来日。国籍は中国のまま資格は永住者。来日後は諸事情で夫と離婚。娘は2人いて、今は近くに住んでいる。次女がよく世話をしてくれていて、安心して居る。いまはアパートで一人暮らしをしている。音に敏感に反応するパニック障害も持っている。

今は障害者が利用できるサービスとして、デイサービスを週5、ホームヘルパー（家事・買い物）を週1、訪問看護を月2回利用している。普段の食事は自炊できないため、配食（弁当）を利用している。弁当の味も良く、満足している。家にいると寝てばかりであるが、デイサービスに行くと、自分にできる役割、例えば、お茶出しや食卓の準備などがある。デイサービスでは中国語も自由に話せるため、楽しく過ごすことができている。

訪問介護（ヘルパーによる生活支援）では、最初は自分のリズムをつかむまでは戸惑いもあったが、慣れてくると特に問題となるようなことはなかった。来年になれば、介護保険サービスも利用できるようになる。そうなれば、もう少し幅広いサービスが利用できるようになり、介護する家族ももう少し楽になる。介護のキーパーソンである次女は、介護のために1年ほど前に転職せざるを得なかった。また、次女が子どもの進学受験で大変な時に、グループホームに入所させようと思って、障害者支援基幹センターを通じて探してもらったが、日本語が通じず、文化が異なることから、受け入れてくれるところが見つからなかった。今は家族で障害者サービスを利用しながらなんとかなっているが、もし、なんらかの事情によって、家族が介護できなくなった時に、現状では受け入れてくれるグループホームがないため、将来はとても不安。

自己目標としては、もっと日本語を勉強して、コミュニケーションが図れるようにしたい。体は健康だが普段は運動が少ないため、少し運動もしたい。日本で晩年を迎えるにあたって、最も心配しているのは言葉によるコミュニケーション。言語サービスや外国人障害者も受け入れてくれる施設などの社会的な環境を早く整えて欲しい。

老後に備えるための準備はまだ何も考えていないし、何もしていない。何をどうしたらいいのかわか

らないのが正直なところ。老後の備えはしておくべきことだと思う。老後のライフプランをつくってくれるのであればお願いしたい。

3名とも、それぞれの生活歴は異なっており、家族の事情も異なっていた。日本語の習得にも年齢による差が見られたが、「言葉の壁」が問題の一つとなっていることは共通していた。また、今回インタビューした3名は全員が中国帰国者二世である。一世に対する支援は不十分ながらも行われてきているが、今後は、二世に対する支援も必要になってくるだろう。

(2) ブラジル出身者

インタビュー調査したブラジル出身者3名は様々な経緯で来日しており、生活歴も異なっている。また、出身は同じであっても、考え方は様々であり、年齢によっても変わってくる。

Dは働くために日本にやってきた。今は、定年退職しているが、清掃活動を通じて地域とつながっている。また、日本に感謝しつつ、日本はブラジルに比べて近所づきあいが希薄であると嘆く。だからこそ、つながりをつくらうとしているのだろう。

日本には妻、3人の息子、5人の孫、7人の家族がいるが、一緒に住んでいるのは、妻と長男だけ。食事には気を使っているが、胃の切除をしたので、あまりたくさん食べられない。今、健康面での心配は血圧が低いことくらいである。

年をとったことについても、特に何も感じていない。死ぬのは怖くないが、一日でも長く生きていたいと思っている。「あと10年くらい生きられたらいいな」と言う人がいるが、そういう人に対しては、「何年生きられるかなんてことは、あなたが決めることではない」と言っている。命ある限り、できることをやったらいいと思っている。

私としては、地域の清掃活動をやろうと決めている。清掃活動をしていると、手伝ってくれる人がいる。人を恨んでもキリがないので、ありがとうという気持ちを持つとうと思っている。感謝の気持ちを持っていないと相手にわかってしまう。感謝の気持ちを持ちながら接しているとながらもできてくる。

老後はどこで過ごすかについても、まだ考えていない。いつも「ブラジルに帰る」と言っているし、いつでも、帰れると思っている。ただ、30年余り

日本に住んでいるが、ブラジルには1回しか帰っていない。日本は安定しているからいい。定年退職したが、少しだけ働けば食べていける。ブラジルに帰ったら、そうはいかない。もっと働かないと生きていけないし、働ける場所もない。もうすぐ80歳になるが、日本では高齢者になると、交通機関とか、いろいろなものが安くなる。贅沢をしなければ、仕事をしているときと変わらない暮らしができる。ライフプランは考えていない。今日できることを今日がんばってやろうと思っている。そう思っていれば前に進んでいける。先のことを考えていたら何もやれない。

老後の心配としては、「近所づきあい」である。日本はブラジルに比べて近所づきあいが少ない。仕事から帰ってきてからの時間がない。ブラジルの場合、近所の人とは家族以上に親しく付き合っている。日本では、家に帰ってくると、子どもの面倒を見たり、掃除したりと忙しい。ブラジルの場合は、隣に住んでいる人を気軽にコーヒーに誘ったり、土曜日だからバーベキューをやろうとなったりする。日本で近所の人と会話ができるのは、一斉清掃のときくらいである。他には、以前、わたしは団地の組長をやっていたが、その時には、通路の蛍光灯が切れたから替えてほしいと頼まれたり、駐車場に違う車が駐車しているからなんとかしてほしいと頼まれたりすることもあった。

地域の清掃活動を始めたのは、たまたま清掃活動をしている日本人がいたからで、「手伝いましょうか」と声をかけたのがきっかけである。ゴミを片付け、きれいになったのを見ると、体まで軽くなる。日本人には、いろいろ教えていただいた。組長になったときには何をしたらいいかわからなかったが、尋ねるときちゃんと教えてくれ、とても親切だったが、会社で働いているときには、怒鳴られたりしたが、地域の人とは違う。近所の人たちとは仲良くやっていて、あいさつもしている。あいさつしても返してくれない人もいるが、顔を合わせたら、あいさつするようにしている。そうすると、そのうち、あいさつしてくれるようになる。

介護保険制度は知っているが詳しくは知らない。生命保険は一時期、解約しようと思ったこともあったが、以前、手術をしたときにとても役に立ったので、やめる気はない。「亡くなったらどうしますか？」と訊かれると困ってしまう。死んでからのこ

とはわからない。日本で死んだ場合には、火葬場で焼いてもらうことくらいは知っているが、墓に入れようとしても高いので、どうしようかと思っている。ただ、どうしようもなければ市役所がなんとかしてくれるのではないかと思っている。日本では、すばらしい人たちに囲まれて生活していられるので心強い。

Eは留学で日本に来た。彼女は、趣味を持つことが大切であり、今を大事にして生きることが老後の準備につながるという考えを持っていた。老後の暮らし方はブラジル人に学ぶことも多いのではないだろうか。

ひいおじいちゃんが住んでいた日本に行こうと思って就職する前に留学した。ひいおじいちゃんは、日本語を話すので、家では日本文化中心だった。親や兄弟はブラジルに住んでいる。日本に住んでいる親戚もいるので、もしものときのためにつながっておこうと行ったり来たりしている。

マンションに引っ越した際、隣近所にあいさつに行こうと思ったが、近所づきあい嫌いな人もいたので、挨拶をしない方がいいと大家さんに言われた。なので、近所づきあいのある日本人はいないが、仕事関係で日本人とのつきあいはあるし、趣味でフランス刺繍を習っていたので、その教室の日本人とは交流があった。

今は、老後は日本で暮らそうと思っているが、娘が生まれた当時は、日本で暮らすのは小学校に入るまでにしようとか悩んでいた。ブラジルでも生活できるよう、2年おきにブラジルに帰っていたが、もう帰るタイミングを逃した。

2011年の東日本大震災の際、子どもや家族を亡くした人のインタビューを聞き、今を生きるのが大事だと思った。将来のことを考えるのも大事だが、後悔しないように、今を大事にしようという考えになった。それ（今を大事にすること）が自分にとって老後の準備である。墓はなくてもいい。日系ブラジル人の中でもどうするかはいろいろな考え方があるが、関東に日系ブラジル人の共同墓地があると聞いたことがある。

老後は災害時が不安である。日本に留学した時には、東海地震が来るといった話を聞いて怖かった。2011年の東日本大震災が起きたときは映像がリアルで怖かった。最近、大雨とか多いし、山の近くに

は住みたくない。災害は普段は意識しないが、災害のニュースがあると考えてしまう。

以前は、親を見ていると歳をとっているように思えたが、今、自分がそれくらいの年齢になると、歳を取っている感じがせず、老後っていつからなんだろうという意識の方が強い。もう少し先なのかなあとも思う。ピンとこない。

ブラジルにいる親が心配である。母親は元気だが、父親は母親と同じ歳なのに老けている。母親はいろいろな人と会っており、そうしたことが大事なんだと思う。考え方もポジティブで、病気をしても前向きだった。落ち込んでいてもしょうがない。ブラジルには高齢者が活躍する場がある。ゲートボールは若い世代もやっている。

ブラジル人は仕事とプライベートを分けている。母親は、プライベートでイベントに参加したりしている。日系社会では、ラジオ体操もあり、体操が終わってから、ゲートボールをやったりカラオケをやったり、趣味を楽しんでいる人が多い。父親が65歳のとき、日本に旅行に来たが、同級生が平日に働いているので、暇なので帰りたいということで帰ってしまった。ブラジルの方が楽しんでいると思う。老後はブラジルの暮らしに学んだ方がいいのではないかと思う。

自分は趣味を増やそうと思って40代からフランス刺繍の教室に通い始めたが、教室には若い人がいなかった。教室は、月2回、土曜日に開かれていた。教室がなくなってしまったので、他にないか探しているが、高齢者が通うことを前提に考えられているからか、平日の昼間しかやっていない。自分は働いているので、時間が合わない。でも、働いているときから趣味を始めた方がいい。授業料も材料代もかかるので、仕事をしているときの方がいい。自分がやりたいことを見つけられるような場があるといい。

Fは最近になって老後のことを考え始めるようになり、ブラジル人コミュニティ内でも老後のことが話題に出るようになった。また、母国では、親の面倒は子どもが見るという考え方から、施設に入れることも受け入れられるようになってきており、変化が見られる。

20歳代前半で来日した。当初は1年で帰る予定だったが、それから日本に30年余り住んでいる。

これからも日本にいるだろうと思う。

老後のことはあまり考えてこなかったが、日本は介護保険があり、年金もあるので、ある程度安心はしている。来日してから2回ブラジルに帰国したが、旅行や遊びに行っただけ。ブラジルの年金制度には加入していない。親、兄弟姉妹はブラジルにおり、ブラジルでの暮らしが懐かしくなることはあるが、生活の基盤はすでに日本にあるため、老後ブラジルに戻るということは考えにくい。現在は1人で暮らしており、家族と老後のことについて話すことはない。老後のことを自分ごととして実感できていない。

自分が最期を迎えるときのことは、これまで考えたことはなかったが、何年か前にブラジルの父が亡くなってから、自分の老後のことを考えなければならぬと思うようになった。もし、そのような機会、勉強会があったら参加したい。例えば、国籍が日本でない人が亡くなった時の手続き、相続のこと等、細かいことかもしれないが、手続きは複雑だろうと思う。SNSでブラジル人のコミュニティに入っており、そこでは時々話題になる。日本で葬式をするときのこと、遺体をブラジルに輸送することが可能かどうか、亡くなった方の口座を動かすことができるのか、というようなことが投稿されるのを見る。ただ、確かな情報はないままのことが多い。市役所の手続き等、やらなければならないことはたくさんあるが、日本ではそういう情報を得る場所があまりない。

ブラジルにいる母には持病がある。難病ではあるがまだ自分で動くことができる。近くに妹や弟がいて通院時の付き添いをしている。離れたところにもう一人弟がおり、彼が長男なので、何かあったらその弟が母を引き取ると思う。ブラジルでは自分から親を見るという人が多いが、難病になると家で見ることは難しい。自宅で世話をするのは負担が大きい。施設に入ることを選択する人は増えており、社会的にも受け入れられている。ただ、ブラジルは多様な文化背景の人たちがいるので一般化することは難しい。

日系人は施設に入ることに抵抗がないと思う。自分も、経済的な問題がなければ日本で施設に入りたい。周りに迷惑をかけたくないから。皆、いつかは死ぬが、心配なことは、長く生きるというよりも健康でいられるかどうかということ。

日本には終活というものがあるが、日本に暮らす外国人がどこまでその考えを知っているだろう。私は日本語がわかるので、日本のテレビも見ると、情報が入ってくるが、そういう情報が入ってこなければ、終活について考える機会はないと思う。終活は、楽しいことでも、嬉しいことでもないけれど、現実を見なければいけない。終活を考えるための勉強会があるといい。今は何もしていないが、意識するだけでも随分違うと思う。ブラジル人コミュニティの中でも宗教は異なるが、ブラジル人が集まる教会はあちこちにあり、教会は死後のことを考えるにはいいところだと思う。

早いうちから老後のことを考えた方がいいのではないか、そのための支援をどうすればいいのかといった観点からインタビューを行ったが、D、Eにおいては、現時点でつながりをつくっておくことによって、それがセーフティネットになると考えている。また、将来のことも大切であるが、今、生きがいを持って暮らすことも大切であり、その積み重ねによって、結果として、老後も生きがいを持って暮らすことが可能になる。そうした老後に向けた知恵は、むしろ、ブラジルの暮らしや考え方の中にあり、双方向的に高齢者支援をすることによって、日本の高齢化問題にも寄与するのではないかと考えられる。一方で、ブラジル人たちの考え方も変わりつつあり、終活を意識し、情報を得るための勉強会なども必要とされている。

(3) ポリビア出身者・ベネズエラ出身者

ポリビア出身者2名、ベネズエラ出身者1名にインタビューを行った。アンケートの配布方法が、外国人コミュニティ団体経由ということもあり、3名とも、ボランティアや地域貢献の活動に関わりを持っていた。

Gは、土曜日は団体の教室活動³⁾を通じて母国の人たちと交流することを楽しみにしており、日曜日は家族と過ごすのが楽しみとなっている。

1994年、30歳代後半で、長女、長男と共に来日した。来日当時、長女は10歳、長男は5歳だった。最初は学校に馴染むことができず、日本食も口に合わず、給食が食べられない等、苦労も多かった。7年前にコロンビア出身の男性と結婚して、夫、長女との3人暮らし。夫は板金の仕事をしており、長女は会社勤め。長男は結婚して近くで暮らしており、

孫が2人いる。60歳の時に孫が生まれ、孫の世話をするため仕事を辞めた。

現在は、平日は、家事全般や5匹の犬の世話をしており、土曜日は、ボリビア人の運営する団体の教室活動に参加、日曜日は毎週家族が集まり昼食から夜までを一緒に過ごしている。団体の教室活動は、facebookで紹介しているのを2年前に見つけて参加するようになった。当初は参加者としてであったが、現在は教える側として講師のアシスタントを務めている。好きな活動を通じて、地域に暮らすボリビア人たちと交流できる土曜日は毎週楽しみにしている。毎回10人ほどの参加がある。メンバーは50～55歳くらいの人たち。電車とバスを乗り継いで通っている。

日曜日は、同居している夫と長女、近くに暮らす長男一家、姪が毎週自宅に集まる。家族と過ごす日曜日は楽しみである。地域の人たちとの交流はあいさつのみ。日本人の高齢者が多い。会うとあいさつはするが、おしゃべりはしない。

母国の両親は他界しており、親しい家族はいない。2人の子どもが日本にいるため、今後も日本で生活していく。年金はないが、夫、長女、長男が経済的には生活を支えてくれている。平日も孫たちが学校から帰ると、カメラで顔を見ながらおしゃべりをしている。毎日孫の世話をしてきたので、孫たちが成人した後は寂しくなるだろう。

健康面ではコレステロール値が高い等、いくつかの問題はあるが、月に1回通院をして投薬を続けている。車を運転しないため、通院は夫や長女等、都合のつく家族が車で送迎してくれている。将来のことはお金のことが心配ではあるが、夫や子どもたちがいるのでそこまで不安はない。葬式やお墓は日本のやり方だと考えている。日本で夫と一緒にのお墓に入りたい。

Hは教会で牧師をしている。母国とつながりを保ちつつ、老後は日本で暮らそうか母国に戻ろうか迷っている。宗教的な面で、葬儀や墓のことが日本に残る上での心配事となっている。

1997年、20歳代後半で、ボリビア人の妻と共に来日した。現在は妻と2人の息子と暮らしている。2人の息子は日本生まれ、日本育ち。長男はボリビア出身の日系二世の女性と結婚、2人の子ども（本

人にとっては孫）がいる。子どもたちは、A高校（多文化背景をもつ生徒が多く通う高校）の出身である。

長男家族とは週に2回ほど会っている。孫たちはとても可愛い。平日は仕事をしており、週末は教会の牧師をしている。礼拝は土曜日の夜と日曜日の昼。教会には15人ほどが毎回集う。

今後、帰国をするかどうかは難しい問題。ボリビアに帰りたいという気持ちは強いが、ボリビアには老後安心して暮らせる介護保険制度や健康保険制度がない。日本には、老後、病気になっても安心できる制度がある。心では帰りたと思うが、安心できる制度がない。その間で揺れ動く。現在、80歳間近の義母がボリビアで1人暮らしをしており、妻が時々戻っている。現在も、義母の介護のためボリビアに戻っている。

出身は小さな町で、町の人たちはみんな、お互いを知っており、家族のような存在。Whats Appやメールで頻りに町の人たちとは連絡を取り合っている。アメリカに移住した人もいるが、その人たちも含めて、町の人たち皆と連絡をとっている。自分は5人兄弟で末っ子。長男は80歳代前半でボリビアにいる。

老後は子どもの世話になろうとは思っていない。子どもたちとは、気持ちの面では助け合うが、経済的なことを助けてもらうことは考えていない。葬儀については、火葬はしたくない。自分はカトリックである。自分の体は神様からいただいたもの。その体を火で燃やすことは許されない。お墓も日本ではなく、ボリビアがいい。

Iはボランティア活動をしていたが、ご主人や本人が病気になったことによって生活が変わってしまった。しかし、家族とのつながりが強く、老後への心配や不安はなく暮らしている。

日本に来たのは1997年。夫は1995年から日本で仕事をしていた。当時、両親がベネズエラで健在だったため、娘3人と母国で生活していた。しかし、両親が亡くなり、家族と一緒に住むために日本にやってきた。当時のベネズエラの状況は国として安定しており、生活には満足していた。しかし、翌年、政権が変わると経済的、治安的に悪化し、ベネズエラに戻ることは難しくなった。

日本での生活は、まず日本語の問題で大変だった。特に14,15歳で来日した娘たちを日本の学校は受け入れてくれなかった。三女は9歳だったため、小学校に入学できたが、いじめがひどく、中学校へは通わなかった。現在は、3人の娘、5人の孫が日本で生活しているが、一緒に住んでいるのは、三女と三女の娘だけ。長女は、団地に息子と住んでおり、次女は、すぐ近くの団地で家族と暮らしている。娘たちは、工場で働いている。以前、通訳の仕事をしていた娘もいる。主人は、手術を2回したため、現在はドクターストップがかかっており、仕事はしていない。自分にも心臓の問題やヘルニアがあり、薬をたくさん飲んでる。

主人は、仕事もあり家族もいて生活に満足していたが、病気を機に、生活が激変してしまった。それまでは、年金をもらいながらアルバイトをしていたが、現在は、年金だけで生活しているので苦しい。

少し前まで10年間くらいボランティア活動をしていた。病気やリーマンショックによって団地を追い出された外国人住民に対して、炊き出しや行政とつなげる支援、食べ物の配付などを行っていた。そうした活動を知って、ボランティアを申し出、朝8時から18時まで、状況の聴き取り、支援の内容を決めるなど忙しく働いていた。最後の方は、リーダーを任されていた。しかし、病気になり、ボランティア活動は辞めた。現在は、孫たちや娘たちに囲まれているので、毎日が忙しく、ボランティア活動に戻ろうとは思わない。

現在の生活は、健康面だけが心配。早く元のような体調に戻れないかと考えている。現在は主人と2人で散歩をすることが趣味。主人は、ずっと働いてきたので、家にいるのはつまらないと言う。自分もヘルニアや心臓の問題がなければ、大好きだったバスケットボールなどをしたい。

近所の日本人のおばあちゃんには挨拶をする。でも、それ以上の関係はない。近くに同じスペイン語圏の人が沢山いるが、彼らのコミュニティに入りたいとは思わない。国が違うと物のとらえ方に差があり、意見が相違することがある。

老後は、日本で暮らすつもりである。ベネズエラの状況は悪化しており、帰ることはできない。とにかく、健康を取り戻し、食うに困らずに生きていきたい。老後の不安や心配は特にならない。病院には通っているが、通訳がいるので問題ない。心臓の医師

は、日本に来てからずっと同じ医師なので信頼しており安心できる。近くにも、最近、通訳がいる病院ができた。さらに、三女は日本語が話せるので困ったときは助けてくれる。

自分に介護が必要になった時を今は想像できない。ただ、娘たちの重荷にはなりたくない。葬儀に関しては、日本のような葬儀ではなく、病院から火葬場、そして海に灰を撒いてほしいと考えている。主人の家族は日系だったため、仏教のお葬式に出たことがある。あのようなお葬式はしてほしくない。また、お葬式の後には、黒い服を着るなどの母国の文化も必要ない。私のことを心の中で思い出す人がいてくれればいい。老後に向けて支援して欲しいことは、今は思いつかない。

Iが、ご主人も本人も健康面の問題を抱えながらも、将来をあまり心配していないのは、長年、診てもらっている医師との間に信頼関係があり、また、それを可能にする医療通訳者の存在があるためだと思う。このような社会環境面での整備が、安心して老後を迎えるためには必要なことである。加えて、3名とも、ボランティアや地域貢献活動を行っている、あるいは、行っていたために、日本人とのつながりは少ないが、同国人や外国人とのつながりがある。また、家族とつながりがあるために、楽しく、生きがいを持って生活をしている様子が見えたと感じた。

(4) フィリピン出身者

フィリピン出身者は、アンケート回答者が少なかつたため、1名しかインタビューができなかったが、Jはフィリピン人コミュニティで活動しており、他のフィリピン出身者の状況についても話を聞くことができた。

15年くらい前から地元でフィリピン人コミュニティをつくっており、現在、100人くらいいる。日本とフィリピンでは、子どもたちに対する考え方が違っている。日本の子どもたちは、大きくなると家から出ていってしまい、親子関係がなくなってしまう。フィリピンでの育て方は、親の大切さ、家族の大切さを教える。老後の準備としては、生命保険もやっているが、子どもの育て方が準備になっている。

子どもは5人いる。フィリピンに親はいるが、老後は日本で過ごしたい。子どもには育て方だけでな

く教育も与えたい。そうでないといい仕事が見つからない。教育を受けさせることが、わたしが子どもたちに与えられる財産だと思っている。5人の子どものうち、3人が大学に行っている。他に高校生、中学生がいる。塾には行かず、インターネットとかで調べて勉強して大学に入った。

日本は異国だから何が起こるかかわからない。なので、積極的に健康診断を受けている。癌が見つかるかもしれない。終末のときには、子どもたちに任せたい。できるだけ、毎日、一緒にご飯を食べている。早く帰ってきて、みんなが揃うまで待っている。そのときに、ファミリー会議をして、友だち関係や来週の休みはどこへ行くかといった話をするようにしている。シングルマザーなので、子どもたちとコミュニケーションをとることを心掛けている。紙に書いたライフプランはないが、last will (遺言)はある。ママに何かあったら、埋めてもいいし燃やしてもいいよとか、母国を大事にするようにとか、保険金は平等に分けるようにといったことを子どもたちに話している。

アンケートでは、介護が必要になったとき誰が助けてくれるか心配であると答えたが、その後、子どもたちとそのことについて話した。現在50歳代前半であり、60歳まで、元気に過ごせるかわからない。ママに何かあったときには、一番上の子が家族を守らないといけぬ。じゃあ、ママの介護は誰が見るかということで、全員で順番に行うことになった。老人ホームに入ることはプランに入っておらず、最後まで子どもたちが面倒を見てくれることになった。

アンケートでは、介護通訳が「必要」に○をつけたが、自分のことではなく、周りの人たちを見てみると必要だと思う。医療とか病気の説明も必要になってくると思う。今は、入院が必要なときは、わたしが病院へついて行っている。

施設に入るには、毎月高いお金を払わないといけぬし、誰かに保証人になってもらわないといけぬ。外国人で入っている人はいるのかと思ってしまう。日本人は老後に備えて積み立てたりして準備しているが、フィリピン人は母国に仕送りをしているので余裕がない。わたしも30年間仕送りをしてきた。仕送りをしながら、老後のための貯金は無理。保険料を払うだけで精一杯である。

仮に施設に入っても、文化や習慣がちがう。今の

施設は日本人向け。母国の年寄りと日本の年寄りでは、過ごし方がちがう。母国では、年を取ったら、子どもや孫とのんびり過ごす、日本人は高齢になっても仕事をしているし、施設の中でも、折り紙とか健康のこととかやっている。それに、介護してくれる人とは血がつながっていないので不安。ただ、歳を取ると、呆けて変なことをしたりひどい言葉を言ったりする。何年か前に介護施設で働いたことがあるので知っているが、認知症の人は、まだ食べてないとか言って、いきなり叩いたりするので、介護する人も強い気持ちがないとやっていけない。

介護されるなら、母語が話せるスタッフがいい。言葉の面ではなく、同じ国の人に見てもらった方が安心する。つながりを感じる。言葉がわかるとかではなく気持ちがわかる。日本人でも相談できるが、同国のの方が気持ちがつながっているので相談しやすい。つながりを感じると心強い。

亡くなったら、子どもたちの自由にしてくれればいいが、できれば宗教に基づいてしてもらいたい。以前はカトリックだったが今はイスラム教徒である。イスラムでは、死んだら燃やさずに埋めることになっているので、できれば埋めてほしいが、墓が高いので、燃やしてもらってもいいと思っている。ただ、もし、母より先にわたしに何かあったときには、燃やす前に、フィリピンにいるお母さんに日本に来てもらって、わたしを見てもらいたい。希望としては、お葬式はしてもらいたいと思うが、子どもたち次第である。日本のやり方で大丈夫である。

病気に対する不安はあり、もう良くなったが、肝臓が悪かった。高血圧は治らないが、薬を飲んだり、運動をしてよくなってきている。

この地域のコミュニティは、家族に守られている。知り合いの高齢者のおじさんは、一人暮らしであるが、同じ団地に家族が住んでいて、家賃とか食べ物とかは、家族が順番に負担している。病院にも連れて行ってもらっている。同じ団地に高齢者が3人いるが、他もそういう感じである。

ライフプランを紙にするのは怖い感じがする。自分の死を準備してくれている人がいると思うと、なんだか怖い。日本人はつくっているみたいだが、フィリピン人は、今日は今日で明日は明日と思っている。

フィリピン出身者は1名しかインタビューしていな

いので、一般化はできないが、家族、特に、子どもとの関係を大事にしており、それが老後の準備になっている。老後の準備としては、例えば、自分の死後や認知症などで自分の意志が伝えられなくなった時、家族が困らないようにするために、エンディングノートに必要な事項を書き残したりする。しかし、毎日、一緒に食事をする中で、子どもたちに意志を伝えたり、誰かに世話にならないといけない場合に備え、子どもたちが支えてくれるように育てることの方が、より直接的で効果のある方法なのかもしれない。

(5) インタビューのまとめ

アンケート調査においても同様であったが、インタビュー調査においても、老後について明確なプランを持っている人は少なく、老後に向けて支援してほしいことは思いつかないという人が多かった。しかし、それでも、漠然とした老後のイメージの中で語ってくれた言葉から、在日外国人の高齢者支援を考える上で、重要な視点が得られた。

一つ目は、「日本に対する思い／母国への思い」である。こうした思いは、老後を考える上で、母国に戻るかどうかといった大枠に関わることであり、日本に残るとしても、日本でどう暮らしていこうかという発想の前提になる。

二つ目は、「老後に備えての知恵」である。「知恵」と言っても、つながりをつくったり、家族を大切にしたり、生きがいを見つけるといった簡単なことである。しかし、これらは意識しないとできないことであり、生きていく上で実践してきたことを老後の切り口から改めて言語化してもらったと言える。

三つ目は、「高齢化を乗り越えるための社会モデル」である。外国人高齢者の暮らしやすい社会環境づくりへの提案のほか、日本と母国を比較する語りの中から、外国人高齢者にとどまらず、日本社会全体が高齢化を乗り越える上で必要なことについての示唆を得ることができた。

上記の3つの視点について、以下に簡単にまとめる。
〈日本に対する思い／母国への思い〉

日本と母国を比べると、日本は制度がしっかりしていて、高齢になっても生活がしやすいという点で評価が高い。老後は母国に戻りたいと思っていても、長年、日本に住んでいるため、自分の居場所が母国にないと感じ、制度面で整っている日本に残ろうという気持ちになる。日本では、あまり近所づきあいができな

かったり、65歳を過ぎても働いている人が多かったりして、母国にいる時のような気楽さや楽しさはないかもしれない。しかし、逡巡した結果、やはり、日本に残ろうという結論に至るのだろう。積極的に日本に残りたいという人もいれば、消去法的に日本に残ろうとする人もいる。こうしたことを前提に、外国人の高齢化について考えていく必要がある。

〈老後に備えての知恵〉

日本はブラジルに比べて近所づきあいが希薄であるという。これは、インタビュー対象者だけでなく、ブラジル人の集住している愛知県の県営保見住宅の住民を対象に行ったアンケート調査でも、心配なこと・困っていることとして、ブラジル人は「ご近所づきあいが少ない（少ない）」を挙げている人が最も多く、55.9%となっている [多文化多様性の輝く保見団地プロジェクト2021, p.14]。そのため、地域の清掃活動に参加したり、ボランティア活動を行ったりして、つながりをつくろうとしている。

また、家族を大切にしている。家族は最も身近なつながりであり、万が一の時に一番頼りになる。特に、子どもへの期待は大きい。フィリピン出身のJは、子どもの育て方が老後の準備になっていると語ったが、他のインタビュー対象者たちの中でも、家族とのつながりがあるので老後への心配や不安はないと言っている人がいた。

こうした「つながり」や「家族」は、セーフティネットとしての役割だけでなく、楽しく暮らすということにもつながる。

悔いのないように最期を迎えることも老後の準備である。そのためには、生きがいを持ち、前向きな気持ちで日々を送ることが大切である。ボランティアや地域活動をやってもいいし、趣味を持ってもいい。趣味は、歳を取ってからではなく、若いうちから始めた方がいいという。趣味にはお金がかかるので、働いているうちから始めた方がいい。しかし、日本では、趣味の教室には、主として、働いていない人が通うため、開講される曜日や時間が働いている人には合わないことが多い。仕事とプライベートをきっちり分けるのも大切だと考えている。こうした考え方は、日本人も見習うべきではないだろうか。将来を考えてプランを立てることも重要であるが、一日一日を大切にすることも重要である。

〈高齢化を乗り越える社会モデル〉

いざ、病気になり、体が思うように動かなくなる

と、不安や焦りで、どうしていいかわからなくなる。また、突然、病気になると生活が激変してしまう。

経済面での不安に加え、病院や施設を利用しようとすると、まず、言葉の壁や文化の壁が立ち上がる。外国人が日本で老後を迎えるにあたって、最も心配しているのは言葉によるコミュニケーションである。言葉が通じず、文化が異なる人を受け入れてくれる施設を探すのも大変である。こうしたことから、言葉や文化がわかり母語が話せるスタッフのいる施設が求められている。

医療通訳者のいる病院も必要である。医療通訳者のいる病院では、医師との信頼関係を築くことができ、将来の不安が一つ消える。多言語スタッフや通訳者のいる施設や病院は、多文化社会において必須である。もっとも、こうした環境整備は、外国人高齢者だけでなく、外国人全般にとって必要なことである。

外国人高齢者の課題としては、葬儀や墓をどうするかといった課題も挙げられ、老後を日本で暮らそうか、母国で暮らそうか迷う原因の一つとなっている。生きているうちは、日本のやり方に合わせようとしても、最期は自分の文化や宗教を大切にしたいという人がいた。日本では、ほぼ火葬であるが、宗教的な面で土葬にしたい人もいる。土葬はイスラム教が有名であるが、キリスト教も本来は土葬である。神道も基本は土葬であり、日本でも、例えば、1935年の火葬率は50%を超える程度であったという⁴⁾。世界的に見れば、火葬はそれほど一般的ではなく、多様な葬儀や埋葬の形が求められる。また、葬儀や墓のことも含め、老後のことを考えようとする、終活に関する情報が不足しており、勉強会のような、考えるきっかけとなる場も必要とされている。

「障害の社会モデル」という考え方がある。障害者が受ける制限は、障害のみに起因するものではなく、社会における様々な障壁と相対することによって生ずるもの⁵⁾という考え方である。こうした考え方を高齢者に当てはめることは可能であり、2016年度の厚生労働白書においては、「人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える」がサブタイトルになっている。社会モデルとして考えた場合、上記に挙げた言葉の壁や文化の壁、画一的な葬儀や埋葬の形は、外国人高齢者にとっての社会的障壁であり、それを取り除く責任は外国人高齢者ではなく、社会の側にある。また、この白書においては、「人口高齢化を乗り越える視点」として、「暮らしと生きがいとともに創る『地域共生社会』

へのパラダイムシフト」を挙げている。そのために、「地域包括ケアシステムの構築」が提案されている。ここで示された、地域で暮らすための支援の包括化、地域連携、ネットワークづくりは、高齢者であることと外国人であることが交差した外国人高齢者にとっては、より一層、求められることである。

加えて、白書では、こうした体制の整備を行うのは行政の役割であるが、実際に地域での体制を担う主体を考える時、住民を含む多様な主体の参加と「支え合い」が重要になると指摘している。つまり、これまでの「支え手」「受け手」に分かれた社会から、全ての人々が一人一人の暮らしと生きがいを共に創り、共に高め合う地域社会を構築することが重要であるとしている。

生きがいについては、「老後に備えての知恵」のところでもまとめたとおりであるが、こうした生きがいを日本社会において創るためには、近所づきあいや家族とのあり方を見直したり、より積極的に、地域とのつながりをつくったり、趣味を持ったりする必要がある。そのためには、仕事とプライベートをしっかりと分けるといった価値観のパラダイムシフトが必要である。そして、パラダイムシフトのためには、これまで「受け手」として想定されてきた外国人から学ぶところも大きいのではないだろうか。

6. おわりに

本研究においては、インタビューを通して、在日外国人の高齢者支援について検討を進めてきた。その結果、外国人高齢者のために取り除くべき社会的障壁を見出すことができ、今後は、それらを取り除く具体的な支援について研究を進めていく必要がある。

その一方で、日本社会の高齢化を乗り越えるための視点を得ることもできた。日本社会は、今後ますます高齢化が進み、多文化化も進んでいくと予想される。そうした中で、日本社会の制度を外国人も利用しやすくすると同時に、日本社会の高齢化を外国人の知恵を取り入れることによって、乗り越えることができるのではないだろうか。これまでの日本社会の高齢化への対応は、日本人だけで考え、日本的価値観によって行われてきたが、多文化な人材や価値観を取り入れることによって、一人一人の暮らしと生きがいを共に創り、共に高め合う地域社会をつくることができる。そう考えると、高齢化社会の多文化化は大きな課題であるとともに、大きな希望であるとも言える。

付記

本研究は、科学研究費（2021・2022・2023年度 日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究(B) 課題番号21H00821 山本理絵研究代表）の助成による。

研究に協力していただいた皆様に感謝します。

注

*1 愛知県立大学客員共同研究員 *2 愛知県立大学非常勤講師 *3 愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程 *4 愛知県立大学教育福祉学部教授

- 1) トヨタ財団の助成を受けて2015年度・2016年度と実施。助成期間終了後は、セミナー等により、外国人高齢者の介護問題や最近では終活についての問題提起をしている。<https://kaigotuyaku.web.fc2.com/> (2022-8-16)
- 2) その後、2022年6月に法務省の策定した「外国人との共生社会の実現に向けたロードマップ」においても重点事項にかかる主な取組の1つとして、「ライフステージ・ライフサイクルに応じた支援」が挙げられた。
- 3) 具体的な教室名はあるが個人・団体が特定されることから「教室活動」と表記した。
- 4) 鶴飼秀徳「世界一の火葬大国ニッポン、カブトムシも茶毘に」『日経ビジネス』2016年11月1日。<https://business.nikkei.com/atcl/book/16/102400002/102800004/> (2022-8-16)
- 5) 内閣府「障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針」による。

参考文献

愛知県 (2018) 「あいち多文化共生推進プラン2022」
 —— (2021) 「愛知県外国人高齢者支援事業 外国人高齢者に関する実態調査報告書～ともに老い、ともに幸せな老後を暮らすために～」
 アルベルト松本 (2021) 「日本在住の日系人も老後の時期にきたのか」ディスカバー・ニッケイ <http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2021/11/15/nikkei-latino/> (2022-8-16)
 王榮 (2019) 「異文化“介護通訳”言葉と文化のコミュニケーター～外国人高齢者と介護の橋渡し役～」『共生の文化研究』No. 13
 王榮・渋谷努 (2018) 「中国帰国者の介護問題から見た在住外国人高齢者への介護支援の現状と課題——異文化介護の現場から」『社会科学研究』第38巻第2号 中京大学社会科学研究所
 大橋充人・木下貴雄・神田すみれ・山本理絵 (2023) 「在日外国人の高齢者支援に関する質問紙調査報告」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第71号
 大橋充人 (2021) 『在日ムスリムの声を聴く——本当に必

要な“配慮”とは何か』晃洋書房
 何彬 (2010) 「在日老華僑・華人の老後——横浜中華街を事例に」『首都大学人文学報』No. 423
 川村千鶴子 (2015) 『多文化都市・新宿の創造——ライフサイクルと生の保障』慶應義塾大学出版会
 金春男 (2004) 「在日コリアン痴呆性高齢者への施設における介護支援に関する研究——『ケアワーカー』フォーカス・グループインタビューを通じて」『社会問題研究』54-1 大阪府立大学社会福祉学部
 厚生労働省 (2016) 「平成28年版厚生労働白書——人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える」
 庄谷怜子・中山徹 (1997) 『高齢在日韓国人・朝鮮人——大阪における「在日」の生活構造と高齢福祉の課題』お茶の水書房
 鐘家新 (2007) 「在日華僑華人と異国の老後」『アジア文化研究』第14号
 —— (2017) 『在日華僑華人の現代社会学 越境者たちのライフヒストリー』ミネルヴァ書房
 鈴木雅夫 (2008) 「ブラジルからの報告 出稼ぎ問題を考える 表面化してきた出稼ぎ者の高齢化問題」ニッケイ新聞 2008年1月1日
 高畑幸 (2020) 「在日フィリピン人の高齢化——再編される共同体と相互扶助」『社会再構築の挑戦』ミネルヴァ書房
 多文化多様性の輝く保見団地プロジェクト (2021) 「『多文化多様性が輝く保見団地』をめざした住民アンケート調査報告書」
 名和田澄子 (2015) 「高齢化した中国帰国者に対する介護支援」東海・北陸中国帰国者支援交流センターボランティア研修会講演資料
 林隆春 (2014) 「日本に住む日系ブラジル人が抱える就労・高齢化・精神疾患問題」『ブラジル特報』2014年3月号
 松本美智代・大城凌子 (2020) 「在沖高齢外国人の異文化間介護を取り巻く現状と課題——外国人（被介護者）へのインタビュー調査を通して」『国際保健医療』第35巻第2号
 牧田幸文 (2020) 「多文化の背景をもつ住民の高齢化と支援」『都市経営』No. 13
 森田深雪 (2018) 「中国帰国者とその家族の医療・介護をめぐる経験への考察」『安田女子大学紀要』46
 李善姫 (2015) 「外国人花嫁として生きるということ——再生産労働と仲介型国際結婚」『移民政策研究』第7号
 李錦純・西内陽子・高橋美紗子 (2017) 「看護・介護職がとらえる在日コリアン高齢者支援における特徴と困難感」UH CNAS RINCPC Bulletin Vol. 24